

## 海外研修報告書

中尾沙季子（フランス）

この度「卓越した大学院拠点形成支援補助金経費」を受け、2014年2月18日から20日にかけて、ドイツ・フランクフルトにあるゲーテ大学において行われた国際シンポジウム『レオ・フロベニウス：フランスおよびドイツにおける民俗学の構築と習得の歴史とその交差点』に参加し、発表を行った。以下にその概要と成果を報告する。



ゲーテ大学創立100周年と、レオ・フロベニウス生誕140周年を記念して開催された当国際シンポジウムは、民俗学者であり、また「アフリカ文明」の研究を通じて、アフリカの知識人に大きな影響を与えた、レオ・フロベニウスの人物像を通して、さまざまな研究の、分野、国を超えた対話をはかろうとするものである。実際、ドイツ、フランスを中心に、ベルギー、スイスといった周辺諸国、さらにはアメリカ、カナダやセネガルからも参加者を迎え、またアプローチも歴史学、社会学、人類学、美術史、文献学といった分野を横断する研究の発表に、多岐にわたって議論が交わされた。

社会学、民俗学、文化人類学の学術領域の分岐・発展のなかにフロベニウスを位置づけ、またその「アフリカ美術」に関する研究を民俗学と美術史の往還のなかで捉えようとする第一日目のプログラムは、まさに領域間の対話を実現する刺激的なものであった。また、この「アフリカ美術」のテーマに沿って、一日目の最後には、主催団体のひとつであるフロベニウス研究所がゲーテ大学内に所蔵しているコレクションを見学することができた。

大会二日目は、植民地支配という背景を意識し、フロベニウスの知の獲得体系そのものを批判的に問い直す方向性での発表および議論が展開された。私もそのなかで、フロベニウスとアフリカにまつわる言説の構築という基軸に沿って、フロベニウスの言説とアフリカの知的エリートのみひとりであるサンゴールによるその受容を分析した発表を行った。発表に対し、ダカル大学のドイツ研究者カッセ教授や、フランス高等師範学校のドゥ・レトワール教授をはじめ、会場から貴重な意見が寄せられ、有意義な交換の場となった。

帝国期ドイツという環境に身をおきつつ、独学で知識を獲得し、独自の視点から新しい領域を開拓していったフロベニウスの特異な人物像に象徴されるべく、広範にわたった本大会の議論は、自身の研究を多角的に捉えなおす機会を提供する示唆に富んだものであった。また、帝国史研究をするにあたって、同時代ヨーロッパにおける知の体系を踏まえることの重要性を再認する機会ともなった。大会への参加を可能にしてくれた「卓越した大学院拠点形成支援補助金」関係者のみなさま、とりわけ地域文化研究専攻事務の方々に感謝を表し、報告を結びたい。